



七徳堂鬼瓦

夢を語ろう

もう25年も前の話になるが、私が学生のころの東大薬学部では、D. J. Cramの書いた「有機化学」を教科書として使っていた。「ホスト-ゲスト化学」の分野で1987年に、Pedersen、LehnとともにNobel化学賞を獲ることになるCramである。教科書の裏表紙か何かに、「人生の中で有機化学ほど楽しいことを知らない」というCramのコメントが載っていたと記憶している。バブル世代の大学生で、外に楽しいことが山ほどあり、有機化学なんてこの世で最も退屈な講義だと思っていた私は、人生で何が起る

とここまで自信を持ってそんなことが言えるんだと、Cramのあまりの断言調の言い方に驚愕にも似た違和感を持った思った覚えがある。ところが25年くらいたった私は今、彼と同じことを学生に言っている。どこでこんなにも変わったのか考えてみると、残念ながら日本だけではなく、博士研究員として米国のウイスクンシン大学で有機化学と生命科学の境界領域の研究を行ったときであったように思える（遅っ！）。給料を貰うプロフェッショナルの研究職に置かれていたわけだが、いい教育をしてもらったなと心から感謝している。自分の経験を一般化はできないが、変節の原因を考えると、20~30年と言った比較的時間的な視野に立った研究テーマ設定力の差なのかと漠然と思っている。夢の大きさの違いともいうべきか。法螺と夢は紙一重だと陰で自笑しながらも、この研究の先に何かあるのかを必死に学生に伝えたい。「できることをやってもしょうがない」研究生活を、狂わずにもがき続けるためのエンジンは夢しかない。夢を自分で描ける学生を育てる必要がある。夢を描けない研究者は、他人の夢の奴隷になるだけだ。なんてことを、15年ぶりにウイスクンシン大学に今度は招待してもらって訪れて、時差ぼけが治らない夢見心地の中で書いている。Cramも夢の多い人だったんだろうな。ちなみにCramの人生は少年ジャンプで、漫画として取り上げられた。

金井 求（大学院薬学系研究科・薬学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1421 2012年1月25日

東京大学広報室

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報課

TEL : 03-3811-3393

e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

http://www.u-tokyo.ac.jp/